

住みごこち一番・可児 ―～安心、元気、楽しいまち～の推進



令和3年度 三大ニュース（実績）

12月4日

人権講演会

場 所 福祉センター大ホール
講 師 杉浦・橋本氏(岐阜医療科学大学教授)
テーマ 高齢者の心元気に!!



本センター
設立30周年

みなさまのおかげです!



年 間

学校への支援

- ・標語 (21周年)、300字小説 (14周年)
- ・ぬくもり教室 (10周年)
- ・人権本巡回制度 (13周年)
75冊×2コース全小学校巡回



兼山小、帷子小で開催



市内11小学校人権本巡回

ぬくもりのよろこび

「設立30周年を迎えて」

可児市人権啓発センター会長 半場 仁

「人権」は、性別や年齢、民族、宗教、国籍、出身などにかかわらず、誰もが生まれながらに持っている権利です。その「人権」が守られるためには、私たちが正しい知識を学び、自分の問題として考えていかなければなりません。このため本センターでは市民への広報・啓発活動を行い、人権尊重の理念を深めていく活動をしています。今年度もコロナ禍でソーシャルディスタンス、マスク着用の生活等で、人と人との距離が以前より遠くなりました。そこで特に、長年継続してきた「人権講演会」等を開催できるよう熟慮し、今年度も無事に行うことができました。本センターが設立30周年を迎えられたことは市民の皆様方のおかげであります。今後もご支援・ご協力よろしくお願いします。

特集 令和3年度 人権文化の光彩

(審査員：他団体の代表と関係者)

第21回 人権啓発入賞[標語]の部

2,460作品より選考

【最優秀賞】

きらいより 好きを見つけて 認め合おう
永田 結之晃 (中学三年生)

【優秀賞】

「ありがとう」 ひろがつていく 感謝の輪
飯田 勘太郎 (小学五年生)
あたり前 なんて思わず ありがとう
平野 壮一郎 (小学五年生)
みとめ合おう 人はそれぞれ ちがうから
木村 湊碧 (中学一年生)
勇気こそ 自分を変える だい一步
柴田 紗季 (小学五年生)
きみとぼく ぜんぜんちがう おもしろい
都竹 優斗 (小学五年生)

【入選】

がんばれと 聞こえる声に 勇気です
山本 みらの (小学五年生)
希望はね 努力のつみきだ つんでいけ
溝口 一輝 (小学五年生)
なやみごと ゆう気を出して いってみて
今井 はるか (小学三年生)
みとめよう わたしとみんなの 大事なこせい
黒木 楓 (小学四年生)
見ないふり もうやめよう明日から
少しの勇気と優しい気持ち
前川 菜々子 (中学二年生)
一人じゃない 頑張るみんなが 金メダル
中丸 温翔 (中学二年生)
勇気もち いじめをとめる 一人でも
濱田 幸歩 (小学五年生)

一人でも 話しかけたら かわるかも
吉本 沙也零 (小学五年生)

冷たい目 言葉じゃなくても 傷つくよ
坂田 光春 (中学二年生)

「ありがとう」 可児市にあふれる 愛ことば
日比野 銘子 (一般)

助けよう 見ていただけじゃ 意味はない
大西 快和 (小学五年生)

助け合い 相手を認めて 思いやり
成田 はな (小学五年生)

あいさつに えがおをついたら 元気出る
伊藤 りこ (小学四年生)

「がんばって！」 その声でまた 頑張れる
薄 和奏 (中学二年生)

再確認 言っていいの か その言葉
大竹 華佳 (中学一年生)

負けないで 君は君らしく 居ればいい
後藤 杏菜 (中学二年生)

おかしいよ 上下関係 つくる君
小森 千晴 (中学一年生)

ありがとう いていわれて いい気持ち
二俣 美菜 (中学一年生)

当たり前 失くして気づく 大切さ
中丸 心寧 (中学一年生)

わすれない マスクのしたは えがおだよ
おちあひりく (小学二年生)

あたりまえ そんな毎日 日々感謝
市原 彩 (小学五年生)

差別され 苦しむ相手 考えて
安江 准一 (中学一年生)

「ありがとう」 だいたいな感謝の 愛言葉
佐藤 百笑 (中学一年生)

コロナでも 心でつながる 友達のわ
久保田 一己 (小学四年生)

第14回 人権啓発入賞[300字小説]の部

418作品より選考

【最優秀賞】

ぼくは、転校生

ムーミン (小学六年生)

ぼくは、とてもさ
みしい気持ちだった。
不安だった。ドキド
キした。新しい国、
新しい友だち、新し
い場所。ぼくは、転
校生！

先生や友だちが
何を言っているの
か、早くて日本語が
りかいできない。ほ
くは、いつもマスク
をしていた。だって、
はなさなくて、いい
からだ。でも、写真
をとるときだけ、は
ずすように、言われ
た。ぼくは、はずし
た。すると、ある女
の子が、
「マスクをはずすと、
笑った顔がいいよ。」
と言ってくれた。
ぼくの顔は、まっ
かになった。からだ
があつくなった。で
も、とてもうれし
かった。あしたから、
学校が楽しみななっ
た。



【優秀賞】

大きな笑顔と小さな手

堀部 愛梨（小学六年生）

私は毎日公園で遊んでいた。最近ごみがたくさん落ちていることに気づいた。でも私は、誰かが拾うし別にいいや。くらいにしか思っていなかった。次の日また公園になると、ごみが少なくなっていた。また次の日も公園になるとごみが少なくなっていた。誰かごみを拾っているのか気になって少しおそい時間まで公園に残って待っていた。すると小さな子とお母さんがやってきた。二人でごみ拾いをしている姿を見て私も手伝いたくなってきた。小さな子が私に気づいて



【優秀賞】

人と違う自分

榎本 趙大（中学一年生）

陽平は、空と比べて自分が劣っていると感じている。ある日の放課後、陽平が言った。「空は、すごいな。今日も困っていた下級生を助けたって、帰りの会に言われてたじゃないか。俺には、そんな事は出来ないよ。」すると、空が言った。「そんなことないよ。陽平だって、散らばっていたトイレのスリッパをそろえたり、廊下にこぼれていた水を雑巾で拭いたりしていたじゃないか。それに、そんな事に、すごいもすごくないもないよ。僕がやった事は、人が関わっていただけで、陽平がやった事は、その場に誰もいなかったけれど、たくさんの人の役に立っているよ。」その言葉を聞いた陽平は、自分を人と比べなくてもいいんだと気がかされた。



※挿絵は入賞作品をもとに本センター職員が作成しました。

【入選】

ゆうき

熊谷 優（小学六年生）

私は今、参観日で発表するお母さんの仕事のことを作文に書いている。私のお母さんはせいそう会社でせいそう員として働いている。だが私はクラスのみんなにせいそう員のことをバカにされていて、正直作文に自信がなかった。家に帰って私はお母さんに言った。

「お母さん、参観日学校にこないで。」

「どうしたのよそんなに急に。」

「正直私、せいそう員だなんてダサイと思うの。家もびんぼうなんですよ!!」

「ごめんね。でもね、この世になくていい仕事なんてないのよ。お母さんはほこりをもって働いているのよ。」

私はその言葉を聞いて勇気が出た。参観日、思いきって挑戦してみようと思う。

【入選】

僕が助けなくてはならない

内屋敷 愛美（中学二年生）

「どうしよう。」声をかけたいけど、かけられない。助けたいけど足が動かない。今日、A君がいじめられていた。僕は、見て見ぬ振りをしてはいけないと思う正義感とA君の味方になったら、いじめの標的になるかもしれないと思う気持ちが心の中で争い、何もすることができなかった。

翌日、いじめはさらにエスカレートしている。A君の苦しそうな顔が目に入ると、胸が痛い。「このまま何もせず無視して、何事もなかったかのように生活するのは、立派ないじめだ」と思った。しかし、まだ怖い。足が震えている。けれども、「今ここで僕が助けなくてはならない」と自分に強く訴えかけ、勇気を出して言った。「やめろよ!」

【入選】

無人の助け

中丸 温翔（中学三年生）

自然に囲まれた田舎に越して二年になる。私の住む村には無人販売所がある。トモ子さんという人が自家製の野菜を販売している。そんなある日、見てしまったのだ。一人の少年がお金を払わず野菜を取っていくのを。その後トモ子さんを訪ね、次の日やってきた少年を制止し三人で話すことになった。少年は泣きながら「ゴメンナサイ。」と言った。どうやら少年は親の代わりに昼間は下二人の面倒を見ているらしい。昼食の為だと説明したのだ。私は一喝しようとしたが、トモ子さんの言葉で遮られた。「今度家へおいで。野菜あげるね。」少年は謝罪と感謝の一札を去った。私は「いいんですか。」ときく。「人は助け合えないとね。」私はこの瞬間助け合いを知った。

【入選】

配達のおじさん

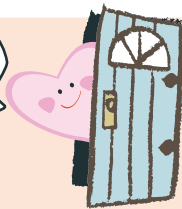
藤田 海々莉（中学三年生）

「や」と涼しくなってきましたね。」そう言っ、荷物の代金のおつりを私に渡してくれた。今日もしじりじりと太陽が照りつける真夏日だった。玄関を開けた瞬間、それが伝わってきた。いつもの小太りの配達のおじさんだ。

「はい。そうですね。」受け取った荷物からも熱さが伝わってくる。今はボタン一つで荷物が届く。世の中が便利になった分、おじさんの仕事は忙しくなったのかも知れない。それでも気持ちよく、荷物を届けてくれた。いつもより暑い日の仕事だからこそ、お客さんと会話を交わすおじさんに丁寧さを感じた。次は私から声をかけよう。「いつもありがとうございます。」と。

※作品はフィクションです。実在の人物・団体名等とは関係ありません。

複写禁止



「突然の思いやりのある行動」

ぬくもり まゆちゃん 38

〈子どもの成長はどこに？〉

作・画：miho / 監修：y・k



(本センター職員による作品です)

★ A さんの暮らす地区は、外国籍の方が多く住んでいます。

先日、A さんは近所のスーパーに買い忘れた食品を買いに、1,000 円札だけ握りしめて出かけました。

少しだけ買うつもりでしたが、「これも必要!これも必要!」と買い物かごの中に入れていったため、気づいたら買い物かごには予想よりも多く入っていました。

暗算しながらかごには入れたので、1,000 円で足りるだろうと思い、会計を済ませるために、レジに並びました。

★いざ、自分の番になりました。レジのお姉さんは「合計 1,025 円になります」と言うではありませんか。

仕方がないので、どの品物を減らそうかと考えていると後ろで、順番待ちをしていた外国の方が、「私の 100 円を使ってください」と言って 100 円を渡してくださいました。

結局お金は借りず、その場で素早く商品を減らしましたが、外国の方のその行動にビックリしました。

★中々、見ず知らずの人にお金を貸すことはできません。

自分なら同じ行動がとれるか。

そして、普段、外国の方に物怖じして気軽に声をかけることができませんが、突然の思いやりのある行動を受けた A さんは、とても感動して、これからは国籍など関係なく、困っている人には声をかけていこうと心に誓いました。(h・m)



啓発ってどんなことをしているの? その4

人権講演会編

本センターでは、さまざまな人権問題に関心を持ち、正しく理解していただくこと、また、人権意識の高揚を目的として、毎年「人権講演会」を開催しています。

職場でのハラスメント・外国人の人権・子どもの人権など、様々なテーマで開催しますが、今年は「高齢者の人権」を取り上げ、杉浦浩子先生・橋本廣子先生(ともに岐阜医療科学大学教授)にお話をいただきました。

うつ・認知症予防などをテーマに、健康意識の高い高齢者の方が多数参加され、手足を使った頭の体操では会場から笑いが起きる場面もありました。

ご協力いただいたアンケートからは、「楽しく有意義な時間でした」「分かりやすく、実践できる内容で良かった」「また参加したい」などの感想をいただきました。

お忙しい中、足を運んでくださった参加者の方々、ご協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



「啓発のひかり」

★芽がでました。年末になってやっと土をかきわけ、5mm程度の頭を出してくれました。農業素人の私にとって、唯一毎年育てている紫色のさやのえんどう豆です。おもえば8年前、人権って何?という状態でこの仕事に携わらせていただき、まだまだ身になるまでには足りませんでした。が、ここまで育てていただきました皆様に感謝です。本当にありがとうございます。(m・k)

★本センターの推進員を引き受けたものの、活動範囲が広く、何をすればよいのか分からず、他の推進員に迷惑をかけないことで精一杯でした。これからは地域で経験を役立てられたらと思っています。(h・s)

★人生も折り返し地点を過ぎ、残りの人生を想う。時間は有限。自分は何を大切にしたいか。優先順位をつけ、出来るだけ自分の気持ちに正直に、毎日を大切に生きていきたいと思う。(y・m)

★高齢の男性が、道路のゴミを拾っている姿を見かけた。ゴミ拾いは良いことと分かっていても中々実行に踏み出せません。自分の身の回りを見渡せば、「人や社会の役に立つこと」を実践している人がいます。日々、「良いこと」を行う機会があります。まずは、「誰かが喜んでくれる」ことを行っていきたいと思えます。(m・h)